

実践報告

SNS が創発することばの学び

— 状況¹の Authenticity とリソース性について —

齋藤 智美

要 旨

書くコミュニケーションにおいて、SNS は気軽に、文字のみならず写真や絵文字等でも伝えられることから、もはや日常生活の一部となっている。本実践は、クラスメンバーが SNS 上でやりとりし、1 週間ごとにその内容を教室で取り上げる一連の活動である。これに対する学生の評価から、学びのリソースについて考察する。SNS 上では投稿し返信を読み、必要に応じて意味や用法を調べ、伝えたいことを書いているが、言いたいことをどう表わすかわからない時、他者の表現によって気づきが起こったり、内容に興味がないと思われた投稿に対しても、他者のコメントの仕方を見て、自らも何か書きたくなるということも見られた。これは互いが互いのことばのリソースとなっていると言えるが、ここには伝えたい内容が先にあり、それを伝えようとする状況の Authenticity が通底していると考えられる。また、伝えるという目的を達成しようとするときに、形式にとらわれずに書けるという SNS ならではの特徵も作用していると考えられる。

キーワード

SNS 書くコミュニケーション 状況 Authenticity ことばのリソース

1. 背景

1.1 書くコミュニケーション

日常のコミュニケーションメディアとして、Social Networking Service (以下 SNS) の利用率は上がり続けている。若者のメール離れが言われて久しいが、最近は LINE から離れつつあるという報告もあり、また、Facebook から写真や動画を主とする Instagram の方に利用が移っているなど (総務省 2019)、書くコミュニケーションは、より短く、ますます気楽なものとなっている感がある。また、従来は通話で行われたことを文字でやりとりするなど、社会生活において SNS は、身近というよりむしろ欠かせないものとして位置付けられることも各種データから明らかである。より簡便に、より気軽に、絵文字や写真、動画とともにコミュニケーションすることが、特に若年層では日常となっていると言える。このように、書くコミュニケーションの重要性/必要性は高まっている。そして日本語学習者もまた、SNS を利用しており、日本語で読み、書き、やりとりすることを望んでいる。ある者にとっては日常社会生活において不可欠であり、日本語での利用によってより豊かなコミュニケーション生活、すなわち生活環境の土壌を肥やすものであり、日本

語の学びを促すものでもある。

ここで報告する実践では、SNS での書くコミュニケーション、すなわち発信するという面に焦点を当てる。そして、日本語教育という文脈において、ことばを生み出す環境は学びにどう作用するのか、より日常的な行為である SNS でのやりとりが、どのように学びとなるのかを考察する。

1.2 先行研究

齋藤他 (2012, 2014) では、2011 年から 2014 年に行われた「日本語かきこ」という活動について報告している。これは初級前半レベルの 4 技能総合型日本語科目の活動の一環として行われた。いわゆる文型積み上げ型の授業において、既習の文型を運用する活動として学内 LMS を BBS 的に活用したものである。10 名前後のクラスメンバーが書き込みを行うが、オンライン上のやりとりは単発で、かつ、メンバー全員の日本語のレディネスがほぼ揃っているという特徴がある。この活動では読む、書く、聞く、話す、やりとりする、理解する、ということが文脈の共有から起こり、いわゆる 4 技能にとどまらないコミュニケーションが繰り広げられた。そして、オンラインで書き込む活動と教室での口頭によるやりとりのブレンディッドラーニングが、包括的な日本語学習に有益であることを示している。

2. 実践報告

2.1 実践概要

2.1.1 目的

早稲田大学日本語教育研究センター2018 年度春学期新規開講科目「SNS と会話で学ぶ日本語～Communicative Japanese through SNS～」は、1.1 で述べた背景をもとにコースデザインをした。シラバス上の到達目標としては、1) 伝えたいこと、話したいことを日本語で表現することができる。2) メッセージを読んでコメントを書いて、やりとりできる。3) 内容について口頭でやりとりを続けることができる。4) 活動を通して、必要な文法・語彙を身につけコミュニケーションできるようになる。という 4 点が示されている。その他、参加者同士の関係性構築も、活動遂行上重要な事柄であり、かつ目的でもある。

2.1.2 クラス概要

科目の履修対象者は初級であるが、実際には初学者から上級前半のレベルまでが混在する 35 名が履修登録した。これは履修者各々の既習文法、表現、語彙に相当の幅があることを意味しており、書き込みを読み、それに対して返信することの負荷の度合いに差が出る可能性を示す。そこで、本来的には初級者対象のクラスであることから、難しいと思われる自分や自分が調べた語彙には英訳を併記し、漢字にはルビをつけることを書き込み時の約束事とした。

オンラインでのやりとりについては、既存の商業 SNS ではプライバシー保護やセキュリティに問題があるため、学内 LMS 上に、Facebook のようにツリー状で書き込めるボードを作成して利用した。

教室では週1回木曜日1コマの開講であるが、活動の流れは以下の通りである。

- ①毎週3~4名が **Original Poster** となり、金曜日の夜までに自由に投稿する。
- ②クラスメンバーは **Original Post** を読み、火曜日午後を期限として任意に返信、その際、**Original Poster** のみならず、メンバー間全体でやりとりを自由に行う。
- ③木曜日のクラスにおいて、オンラインでのやりとりでは意味が曖昧だったことや内容から派生する話題について口頭でやりとりする。その後、書き込みに現れた誤用をリソースとして文法や表現、語彙を学ぶ。

2.2 SNS とことばの学び

2018 年度春学期の 7 週目に、活動を振り返るシートを配布し、記述した。この日の出席者は 27 名であった。ここで書かれた「上手くいったことは何か。その理由は何か」ということについて、計量テキスト分析を行った。この記述によって、この活動の何を学びとして捉えているのかを探るためである。KHcorder では 129 の抽出語があったが、User Local のワードクラウドで示すと、図 1 の通りであり、「わかる」、「文法」、「クラスメート」という語が目立つ。この、「わかる」ということがどのようなことから成るのかを、クラスタリングによって見てみると、図 2 のとおりであった。

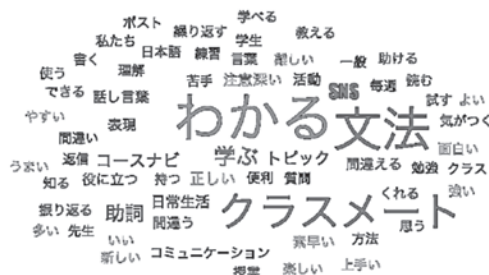


図1 上手にいったことは何か、その理由は何か

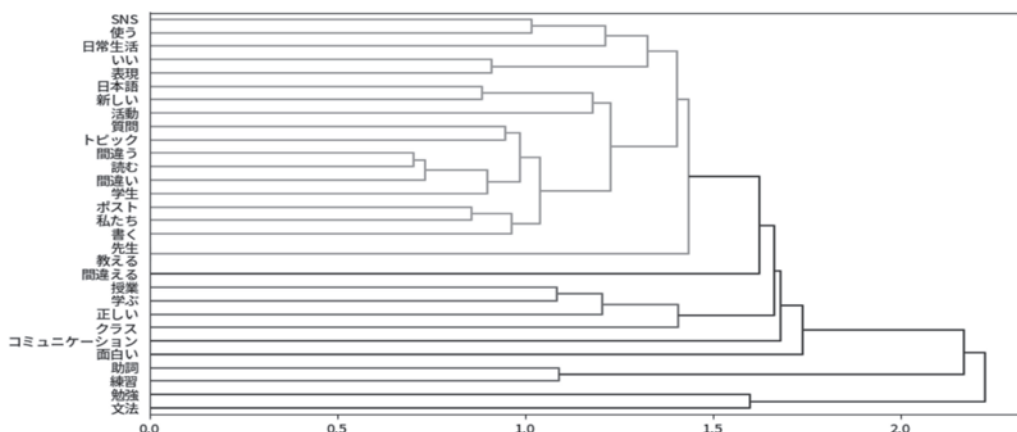


図2 なにを学んだか

コミュニケーションを通して文法を学ぶこと、書き込みの中の間違いから学べること、SNSによって日常の表現が学べることなどが示されているが、これらはクラスメンバーとのやりとりによって起こっていることが認識されているとわかる。

また、対応分析を行い、日本語レベルごとの特徴も見たが、全レベルに共通のこととして、上手いかわず大変なことは文法であり、表現したいことを伝えるために文法と格闘していることがわかった。この点、初級レベルと上級レベルの困難点は文法の難易度によるものではなく、また、特に中級においてはやりとり内容への配慮が特異的であった。

2.2.2 何をどう学んだのか

振り返りを記述した27名のうち5名に対し、このクラスでの学びについて学期終了時に半構造化インタビューを実施した。その結果、クラスメンバーとやりとりするということが持つ学びの構造が垣間見えた。以下は、「文法以外に学んだものは何か」という問いに対して述べられたものの一部である。

- ・ 書き込みを読んで、他の人がどのようなことを考えているのかわかった。
- ・ どのように表すか知りたかった表現が、他の人が書いた中であって、こうすればいいのだと知ることができた。
- ・ 助け合ってコミュニケーションした。面白いコメントがたくさんあった。
- ・ 書きにくいと思ったテーマも、他の人のコメントを見たら、そんな捉え方もあるんだと思って、自分も書くようになった。
- ・ SNS だからレベルは関係なく、話したいことを書けるし、上手な人からもレベルが低い人からも習える。

インタビューからは、クラスメンバーのことばが学びのリソースになっていたことがうかがえる。投稿の意味内容を理解し、それに対する自分の考えや共感を表現することばを探し、あるいは考えたことのないトピックが投稿されているのを見て、それについて考えてみて、そして自分の言いたいことを表現することが、学びであると捉えていると言える。

3. 状況の Authenticity が通底するやりとり

3.1 意味が生まれるところ

この活動によって学んだとされることは、言語形式と言語形式以外のふたつに分類できる。すなわち、文法や表現、語彙といったものと、話題の内容や考え方、捉え方といったものである。このふたつは、学んだ文型を使って何か話してみようといったような段階があるわけではなく、歯車のように機能し合っていると考えられる。

書き込みを読み、それに対して返信、コメントするとき、「私が言いたいこと」は他者のことばによって創発されると言える。例えば、共感を表現するとき、「私もそう思います」「そうですね」「そうそう」「だよね」「わかる」「それぞれ」などがあるが、共感するという意味がまず在って、その上で関係性状況から書き込まれる。生態学的言語観 (Leo van Lier (2004) (宇都宮訳 (2009)) では、ことばと意味は環境との関係性によって、その文脈から創発されるものと捉える。環境とはすなわち状況であり、この活動において、意味が生まれるところでは、伝えようとする状況の Authenticity が通底していると考えられる。

また、「私が言いたいこと」を伝えようとするとき、SNS ならではの特徴の作用が考えられる。ブログも昨今は様々な機能を持つが、一般的にはアカデミックライティングと同様に、序論・本論・結論といったような文章構造が求められる。その点、SNS の場合、Twitter に特徴的なように、まず意味内容がある。それを伝えるために絵文字や顔文字、写真や動画などとともに利用するもので、文章構造によるわかりやすさよりも、意味そのものの伝わりやすさが先立つと言えるだろう。

3.2 AI のことば、わたしのことば、ツールとリソース、そして関係性情况

この活動では、ことばと思考が他者との関係性によって創発されるという、いわば社会的活動を通して学びが起きている。書き込みを読み、それに返信することや、現れた誤用について考えることは、活動全体が学習のリソースとなっていると言える。その際、活動を支援すると考えられるものに自動翻訳などのツールがあり、近年は AI が手軽に利用できる。しかし、学習の支援という意味での、ことばを生み出す他者のことばというものは、それとは相が異なる。実際に自動翻訳を試した履修者は「よくわからないけれど、これは違うと思って、自分が言いたいことは多分、これじゃないと思って」自分で文を考えたと述べていた。ツールではリソースに対応しきれないということであろう。

関係性の中で、有機的にことばをやりとりすることには、どのような意義があるだろうか。ことばの意味や形式は Halliday (1978) の概念のように、状況から創発されると考えれば、ことばの学びにおいても関係性情况は必要条件の土壌だと考えられる。ことばを通して、人と人との関係が築かれていくことが Social Networking である。その土壌としての環境を学びに資するよう組織する、これが教育という文脈で求められるものであろう。

注

- 1 本稿においては、「状況」ではなく「情況」と表記するが、これは生態学的システムを内包する今・此処の環境を動態的に捉える概念を表すものである。

参考文献

- 齋藤智美・渡部みなほ・田所直子・川名恭子・田中敦子 (2012) 「総合的言語活動としての「日本語かきこ」—振り返りアンケート調査からみる学習者の評価—」『早稲田大学日本語教育実践研究』第2号、pp. 45-64
- 齋藤智美・古賀裕基 (2014) 「文脈が積み上がる学習環境デザイン—オンラインと教室で相互作用する「日本語かきこ」—」『WEB 版日本語教育実践研究フォーラム報告』
- 総務省 (2019) 『情報通信白書平成 30 年版』総務省
- Halliday, M. A. K. (1978) *Language as social semiotic: The social interpretation of language and meaning*: Edward Arnold
- Leo van Lier (2004) *The Ecology and Semiotics of Language Learning: A sociocultural Perspective*: Springer. (宇都宮裕章訳 (2009) 『生態学が教育を変える—多言語社会の処方箋』ふくろう出版)

(さいとう さとみ 早稲田大学日本語教育研究センター)